１０．遠藤　直人氏（株式会社 YE デジタル　代表取締役会長）

「目指すは『未来型製造業のまち』。ものづくりしやすいという強みを伸ばし、さらには、高齢化先進都市、環境未来都市として、『住みたいまち』」へ。

遠藤　直人（えんどう　なおと）
㈱安川電機製作所（現・㈱安川電機）に入社。その後、ＩＴ部門の分社化で設立された安川情報システム㈱に転籍。取締役営業本部長、副社長執行役員サービスビジネス本部長、代表取締役社長を経て、2022 年代表取締役会長に就任。

「富裕層にも愛されるまち」

私は、当社の会長に就任して 2 年、北九州市に来てからはトータルで 12 年になります。会員となっているロータリークラブの半分くらいは全国企業の支店長・支社長で構成されています。地元出身の方は少ない中、会員は皆一同に「こんないいまちはない」と言います。転勤を繰り返し、他の地域を経験している方々ばかりですが、その方々に非常に評価されている証と言えるのではないでしょうか。

北九州市民 92 万人のうち、2 万人くらいは富裕層と超富裕層になりますが、北九州市はそのような層も満足できるまちだと思います。小倉北区の都心部は、デパート・スーパー・都市公園・カフェなど、富裕層にとって必要なものがすべて揃っていると感じています。東京や大阪の郊外の富裕層が住んでいるエリアと比べても、北九州市はとてもコンパクトで便利であると感じます。

「高付加価値のビジネスが成り立つまち」

四季ごとにきれいな城の景色を見ることができ、食べものについても、圧倒的に美味しいものを、東京よりもはるかに低廉な価格で食べることができます。その一方で、北九州市の料理人は 2 万円前後の客単価のもと、厳しい世界で腕を磨いている方もいます。あえて、20 人から 10 人に席数を減らし、客単価を増やしても、リピーターに支えられている。実はそのような高付加価値のビジネスも通用するまちなのです。

「交通に強いまち」

交通に関しても非常に便利です。もし、欲しいものが北九州市で揃わなければ、北九州空港から容易に東京に行くことができます。また、新幹線も東京へのアクセスには苦労しません。逆に、北九州市をシニアタウンとして、東京からのアクセスも容易であるということです。

他方、北九州空港については貨物空港として 24 時間体制で運用してもよいかもしれません。製造業と機械産業をはじめ、三交代勤務が得意なまちという長所を無理なく伸ばしていって欲しいと思います。やはり製造業のまちで大きくなって欲しいという思いを持っています。

「情に厚く、よそ者にあたたかい」

市民の気質としては、非常に情に厚いと感じます。自分がロータリークラブに加入した時も、新参者の私を受け入れてくれました。商工会議所に入ったときにも、部会長が一生懸命相手をしてくれました。受け入れることに慣れている

ともいえるかもしれません。

「環境や高齢化を生かした未来のまちへ」

人口減少は、他のどの都市でも迎える現象です。これらを逆手にとって、高齢化先進都市や環境未来都市として、未来をつくっていきたいと思っています。そこで自分が考えている大きな構想を２つ紹介したいと思います。

１つ目は「シニアの集まるまち・北九州フロリダ構想」です。

米国フロリダは、気候変動が少なく、とても住みやすい場所であり、高齢者が住みたいまちとして認知されています。北九州市にフロリダのような場所をつくるとすれば、若松区が最適なのではないかと考えています。

若松区は、自然や野菜・果物や魚介類といった食、アクティビティも魅力的で、高齢者が住みたくなるようなまちの要素を持っています。加えて、壮大なビオトープといった自然共生の場もあれば、グリーンパークといった大型緑化公園もあり、非常に可能性を秘めたエリアではないでしょうか。若松から空港まで、鉄道を通すというのも面白いかもしれませんね。

２つ目は、「フルカーボンからゼロカーボン都市へ」です。

北九州市はかつて、石炭の積み出し等石炭産業で栄えた、言わば「フルカーボン」の都市でした。しかし、今では未来に向けて、洋上をはじめとした風力発電産業の形成にも力を入れていますし、EV の工場もできます。このように「ゼロカーボン」を目指し、北九州市の「環境」という強みを生かした新たな産業を作っていくことが必要ではないでしょうか。

人々の生活スタイルのレベルにおいても、小倉北区の旧電車通りを自動運転のみ運転可能として、家に駐車場を持たなくてよいまちをつくるといったことも夢があると思います。自家用車はサブスクリプション制、使いたいときに自動運転で自宅まで来るような設計にし、通勤用と家庭用を使い分けるというような運用にしても面白いのではないでしょうか。使用する車も EV を活用し、空いている駐車場で充電するなどにより、「所有」ではなく、「シェア」するようなまちになって行くイメージです。小倉はかつて路面電車が走っていたので、そのようなスタイルもしっくりくる気がしています。自動運転を危ないと捉えるか、チャレンジと捉えるか。チャレンジと捉えることで、良い発信となっていくのではないでしょうか。

「未来型製造業のまちになってほしい」

北九州市は理系のまちであり、テクノロジーに親和性があります。これからも製造業は捨てず、私自身も製造業の従事者の人たちが根付くまちにしたいと思っています。「ものづくりは北九州市がやりやすい」と製造業の方々には思ってもらいたい。未来のエネルギーや未来の製造物を作れるようなまちになればよいと思います。反対に、製造業をそれ以外の別のものに完全にシフトさせることは難しいのではないでしょうか。いいところを伸ばしていくことが大事です。得意分野の製造業で大きくなり、住みたいまちになっていってほしいです。